

平成30年度  
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI  
(研究成果の社会還元・普及事業)  
実 施 報 告 書

HT30086 自然の色と素材でテキスタイルデザイン～藍の生葉染め&絞り染めを体験！



開 催 日： 平成 30 年 9 月 15 日(土)

実 施 機 関： 多摩美術大学

(実施場所) (八王子キャンパス)

実施代表者： 深津 裕子

(所属・職名) (美術学部共通教育・教授)

受 講 生： 小学生 3 名、中学生 7 名、高校生 6 名

関 連 URL： [https://www.facebook.com/TAU2018hiratoki/?ref=page\\_internal](https://www.facebook.com/TAU2018hiratoki/?ref=page_internal)

【実施内容】

・受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点

本プログラムは、「日本の伝統的染織技術の持続可能なテキスタイルデザインへの展開に関する研究」(平成 25-27 年度/基盤研究(C)/25350061)及び、「西表島の衣文化資源を基盤としたサステナブルデザインとエコツーリズムへの展開」(平成 29-31 年度/基盤研究(C)/17K02039)の研究成果をもとに実施した。具体的には、日本の伝統的染織文化の調査研究で得られた天然由来の染料や自然を活用した染色技法を基盤に、テキスタイルデザインの原点に戻ったプログラムとして実施した。

大学のカリキュラムと連携させ、大学生の学び・研究の場を受講生が肌で感じられるように計画した。具体的には教員と大学生が 4 月よりキャンパス内で栽培した植物を使い、受講生が染色体験をするようにした。天然由来のテキスタイルや制作技法については、今日の環境教育や持続可能な社会のための提案としても有用である。しかしながら、現代社会では先端的なテクノロジーや産業、華やかなファッション、ファストファッションが主流である。現在の小・中・高校生に原始的な染色や染色技法に対する興味をもってもらい、参加してもらえるよう広報の際にはその有用性をアピールした。結果、多数の応募があり、定員を 20 名から 23 名に増員するに至った。当日は 7 名の欠席者が生じたため、16 名で実施した。

受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点は以下のとおり。

1. 事前学習を促すことで持続的な学習と思考する一定の期間を設けた。SNS を通じて、キャンパス内で栽培する藍の発育状況や、藍染に関する歴史や植物の特徴について情報を発信した。
2. 絞り染の方法に関する動画を 5 本制作し、SNS で受講生に配信することにより、事前に技術習得を促した。
3. 事前課題として、履修生に絞り染のできる布を送付し、事前学習の成果を「私の空」をテーマに実施することを促し、プログラム当日に持参し染色することとした。

### 【当日のスケジュール】

- 9:40-10:00 受付（場所：多摩美術大学 八王子キャンパス 共通教育棟）
- 10:00-10:15 開講式（あいさつ、オリエンテーション、事業推進委員による科研費の説明、  
教員・アルバイト大学生・受講生の自己紹介）
- 10:15-11:00 講義「自然との共生、手の記憶」 深津 裕子
- 11:00-11:10 休憩
- 11:10-11:40 実習①模様のデザイン 深津 裕子
- 11:40-12:40 昼食・昼休み
- 12:40-13:55 実習②藍の葉っぱから染料を作る 辛島 綾/柳下 恵
- 13:55-14:40 実習③模様を染める 辛島 綾/柳下 恵
- 14:40-15:00 休憩
- 15:00-16:00 実習④展示・講評・ディスカッション 深津 裕子
- 16:00-16:10 休憩
- 16:10-16:20 総括 深津 裕子
- 16:20-16:40 修了式（未来博士号授与）/アンケート記入/記念撮影
- 16:40 終了/解散

### 【実施の様子】



1. 講義「自然との共生、手の記憶」



2. 実習① 模様のデザイン 「私たちの空」をテーマに全員で一枚の布を絞る様子



3. 実習②藍の葉っぱから染料を作る キャンパス内の数力所の藍畑で藍の葉を摘む様子



4. 実習②藍の葉っぱから染料を作る 葉から染料を採取するために茎を取り除く様子



5. 実習②藍の葉っぱから染料を作る  
ミキサーで葉を液状にして濾し、染料とする様子



6. 実習③模様を染める 藍の染液に絞った布を浸透させて染める様子(左)と洗浄する様子(右)



7. 実習④展示・講評・ディスカッション  
絞り部分を解きながら出来上がった布を掲げる様子



8. 講評後の記念撮影 受講生が個人課題を肩に掛け(前2列)、大学生が全員で染めた布を持って撮影(後2列)

#### 【事務局との協力体制】

- ・研究支援部が振興会への連絡調整と、提出書類の確認・修正等を行った。
- ・経理部及び研究支援部が委託経費の管理を行った。
- ・広報活動は、実施者、研究支援部、総合企画室、入試広報課が協力して本事業についてPRした。
- ・研究支援部が本事業の当日の写真撮影や受付、運営サポートを行った。

#### 【広報活動】

- ・総合企画室(広報誌、HP、SNS 発信等)、研究支援部(教育委員会・学校への連絡、チラシ・ポスターの配布等)、入試広報課(学校・予備校訪問、イベントでのチラシ配布等)、実施者が協力して広く募集を行った。
- ・本学の大学広報誌、大学HP、オープンキャンパス(7月)でのチラシ配布の他、八王子市の広報誌「広報「はちおうじ」」、マスコミ等のメディアとのネットワークを用いて広く募集告知を行い、本事業についてPRした。また、実施報告は、本学の大学HP等でも公開をおこなった。

#### 【安全配慮】

- ・実習の安全確保の為、実施協力者(学生アルバイト)を常時配置した。
- ・不慮の事故等の対策の為、実施協力者には事前に打ち合わせを行った。

- ・受講生、実施協力者(学生アルバイト)は短期のレクリエーション保険に加入した。その他の実施者については、大学にて加入の保険が適用された。
- ・受講生の食事については、アレルギー等について、事前に本人・保護者に確認した。
- ・参加者の事故、怪我、体調不良等の対応として、大学保健室と協力体制を整えた。
- ・実施前に受講生・保護者に対し本プログラムの概要や実施時の写真撮影等の説明書類を送付し、予め同意を得た。
- ・作業を行う際には、手袋を着用させた。

**【今後の発展性、課題】**

植物の発育状態の管理が非常に困難であったが、予定通りのプログラムを施行することができた。テキスタイルデザインを通じて、自然の素材と人が関わるものづくりプログラムへの発展性が期待された。テキスタイルデザインを通じて知識の習得、技術の習得だけでなく、受講生間や大学生とのコミュニケーションにより、相互理解や分かち合いができた。プログラムを1日実施して終了するだけでなく、成果物の情報公開や展示などを含めたフィードバックおよび総括的なプログラムの提案が今後の課題である。

**【実施分担者】**

辛島 綾 美術学部・講師

柳下 恵 美術学部・助手

**【実施協力者】**     16 名

**【事務担当者】**

恩蔵 昇 研究支援部研究支援課・部長

長井 佑馬 研究支援部研究支援課・書記